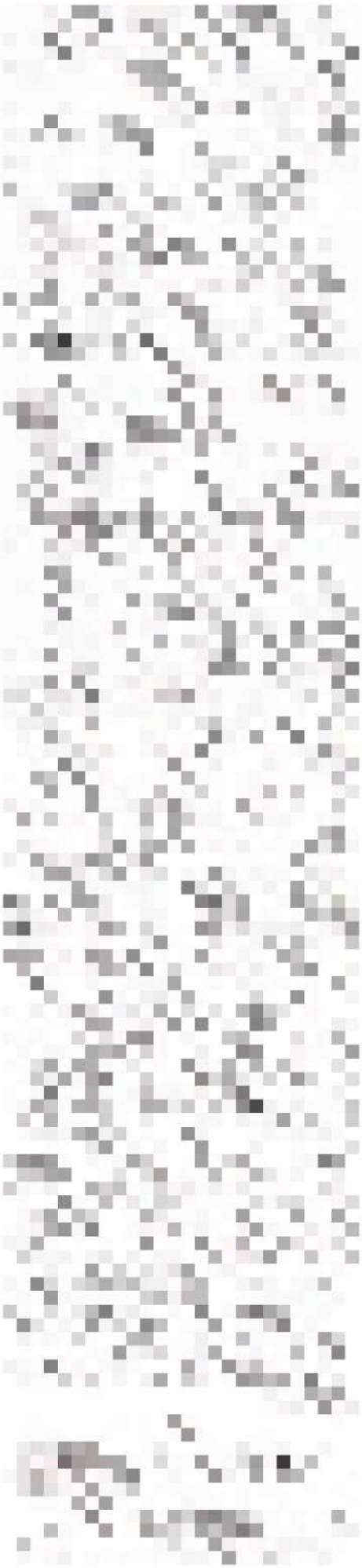
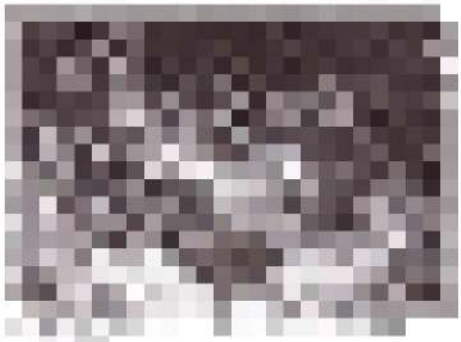
CONCERT & EVENT

11月〜12月

コンサート、イヴェントから

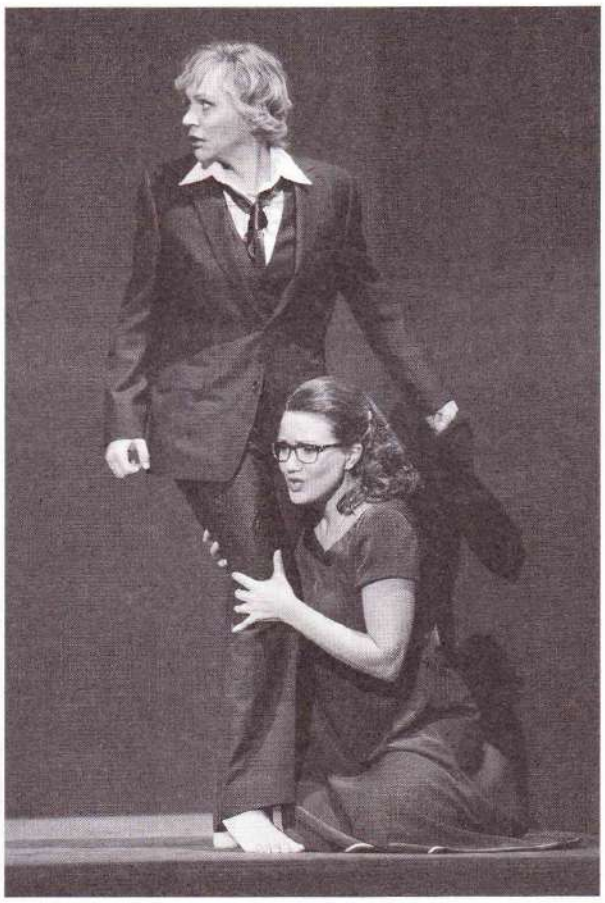




Opera ホモキ＆ルイジ、チューリヒ歌劇場《フィデリオ》新制作

2012年就任したチューリヒ歌劇場総裁アンドレアス・ホモキと音楽総監督ファビオ・ルイジが、初めて演出家と指揮者として組む《フィデリオ》は、2013／14シーズンで最も話題を集めていた。

幕が開くと一面灰色の箱があり、音楽が始まったが、しばらく何が起こったのか分からなかった。ピストルを構えているのがピツァロで、目隠しをされているのがフロレスタン、壁に押さえつけられているのは女装のレオノーレで、かの女を制止しているのがロッコだと分かった頃には4人は取っ組み合っており、ピストルが暴発したらしく、レオノーレが崩れていく。倒れていた彼女が黒いワンピースを脱ぎ、白いスリップ姿で起き上がるうちに、音楽は「《レオノーレ》序曲第3番」に変わっていた。マルツェリーナ



チューリヒ歌劇場《フィデリオ》(12月8日) 写真右も
©T+T Fotografie/Toni Suter

が男装の衣裳を持って登場し、レオノーレに服を着せる。そして物語は普通に始まり、第2幕の四重唱になると今度はハッピーエンドとなるが、幕切れ直前、合唱団の合間から冒頭と同じように倒れているレオノーレが見えるのである。ホモキは「この作品はこのように上演されることを待っていたのではないかと思われるほど」の確信を持って演出したそうだが、不可解な気持ちだけが残った。

音楽的には、ルイジが「根本的解決」と評価している通り、より集中できる上演形式だった。全てのセリフはカットされ、後ろの壁に卜書きが映写されたのだ。時間が短縮できたため休憩なしで上演された。特筆すべきは第1幕の四重唱だ。マルツェリーナ役のジュリー・フックスが息を飲んだようなピアニッシモで歌い始め、それを、より太い声のレオノーレのアニヤ・カンペが受け継ぐと緊張感が一層高まる。男声が加わるとはじめて視界が広がったように音楽が展開し始める珠玉の数分間だった。しかしその他の部分は、ソロ楽器も目立ち過ぎ、それに応えたのか立派な声を持つフロレスタン役のブランドン・ジョヴァノヴィッチの独白の大声量には失望させられたりと、全体的に荒削りな印象を与えた。

200年前の、自由への渇望がテーマの《フィデリオ》を現代に再現する難しさは分かるが、結末を読んでしまった推理小説のような展開方法と、あの高らかな自由への讃歌を視覚的悲劇が邪魔することへの欲求不満が残り、演奏会形式で聴いてみたいと思わされた(12月8日初日所見)。

(中 東生)